

Case2

AIが変える家事と社会

家事労働へのAIの導入に関する研究プロジェクトをリードされている永瀬伸子先生にお話を伺います。



永瀬 伸子

基幹研究院 人間科学系 教授
専門は、労働経済学、社会保障論。
博士（経済学）。女性のキャリアと出産、
ワークライフバランスなどを研究テーマ
としている。

Q まずプロジェクトの概要について教えてください。

A AI等が仕事の未来をどうかえていくのか、内外で活発な研究が行われていますが、それが家事・育児・介護・買い物など、家事をどうかえていくのかという視点の研究はまだほとんどありません。そこでOxford大学Ekaterina Hertog氏チームとの日英共同プロジェクトとしてJST-RISTEXから競争的資金を得てこの研究をはじめました。本学生活工学共同専攻の太田裕治先生や、文理融合AI・データサイエンスセンター長の伊藤貴之先生など自然科学系の先生にも入っていただき、労働経済学・社会学系の他大学の先生方、さらに企業家ともタッグを組んで研究を行っています。

Q 具体的にどのような調査を進めようとしているか、またどのような結論が出ると予想されるかについてお聞かせください。

A 技術面の未来予想については、聞き取りに基づき、日英でデルファイ調査を作成、これを実施しています。他方、そうした技術がもしあるとして、消費者の利用意向はどうか、男女、働き方、家事の種類、価格でどう異なるか、Vignette調査を行い消費者意向を解析します。その上で日英の男女の生活時間に落とし込み未来予想します。日英でどう異なる結果が出るか、結論はまだこれからです。

Q このプロジェクトは英国との共同研究と伺っていますが、英国と日本でAIの導入にどのような意識差があると予想されていますでしょうか。

A 日本は、鉄腕アトム、ドラえものの伝統があり、ロボットは仲間のイメージもあります。他方、英国ではロボットはモノ 仕事を奪うというイメージもあるようです。ただ家庭への導入において日本は決してすんではいません。この研究期間中にコロナ禍が起き、学校の休校に奮闘する日英の母親が気になりました。昨年コロナ禍における仕事と生活について、生活科学部の先生方と日本の調査をしました。教育におけるICT利用は、日本は英国に大きく劣るとわかりました。家庭でタブレットまたはコンピュータへのアクセスがないという小学生は、英国では5%でしたが、日本は22%にのぼり、おおいに課題を感じます。

Q 最後になりますが、家事労働に対する将来展望について、さらに家事と日常生活の両立を目指す方々へのメッセージをお聞かせください。

A 家庭内へのAI、ICTの実装には、実際に家事にかかわる女性たちの視点や開発への参加、アイデア提供も重要だと考えます。テクノロジーをどう良い形で導入し、場合によってはどう規制するのか。過去40年間、電化製品の開発普及で家事の省力化がすすんでいます。統計にみる主婦の家事時間は、実は最近まであまり減らないでいます。人生100年時代の未来に向けて、女性がキャリアを失わず、同時に子育てやケアの時間を男女がわかちあうことができる、そうしたより良い未来のために何ができるか、自然科学と社会科学とで対話していきたいと思います。

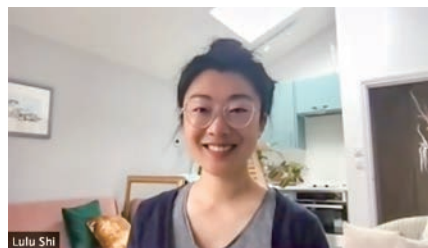
どうもありがとうございました。



Nobuko Nagase



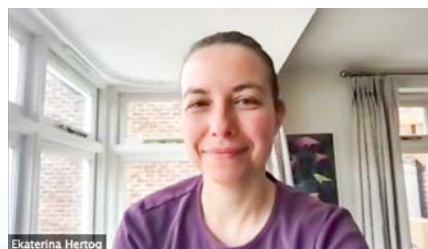
Vili Lehtonen



Lulu Shi



yoshiko shimada



Ekaterina Hertog

▲ Oxford大学の研究者たちとのオンライン研究会の様子